

2016 年秋季大会・一般研究発表要旨

La notion de « paysage » chez Michel Serres

Yuiko AGATA
Université de Tsukuba

Le but de cette présentation est d'interroger la notion de « paysage » telle qu'elle apparaît dans *Les Cinq Sens* de Michel Serres dans le contexte du corps et de la sensation.

Si la philosophie serrienne, en particulier la théorie de quasi-objet, est aujourd'hui bien connue, les problématiques de corps et de sensation, pourtant incontournables pour saisir la pensée de Serres, sont quant à elles méconnues. La notion de « paysage », à laquelle Serres recourt pour reconsidérer ces notions de corps et de sensation, est donc à investiguer.

L'expression de Serres lorsqu'il écrit qu'il faut « randonner » le « paysage » résume la vision serrienne de cette notion. A l'opposé de l'histoire occidentale qui considère en général le « paysage » comme un objet visuel placé devant un observateur, Serres, quant à lui, réexamine cette notion comme un espace dans lequel on pénètre et « randonne », et donne ainsi au « paysage » une corporéité et une tacticité. L'intervention du corps et de la sensation dans le « paysage » permet à Serres de redéfinir les caractéristiques de localité ou de concret. Autrement dit, il s'agit pour le philosophe d'inclure dans la notion traditionnelle de « paysage » la sensation corporelle et le toucher jusqu'alors sous-estimés en tant que perception ambiguë. Grâce à cela, le « paysage » est présenté comme un nouveau cadre de connaissance mettant en équilibre l'unicité et la diversité, l'universalité et la localité, voire l'abstrait et le concret que l'histoire de la philosophie oppose.

A travers cette étude, nous pourrions finalement relier cette notion de « paysage » avec l'ensemble de la philosophie de Serres, notamment à travers la théorie de quasi-objet au centre de celle-ci. Il sera possible de dire que la notion de « paysage » et la théorie de quasi-objet confluent de façon complémentaire au niveau du corps et de la sensation.

« Le cercle archéologique dans *L'archéologie de savoir* de Michel Foucault »

Yudai SHIMIZU

Dans cet exposé, nous étudierons *L'archéologie du savoir* de Michel Foucault afin de mettre en relief la relation ambiguë entre les deux concepts-clés employés dans cet ouvrage : discours et énoncé. Chacun de ces deux notions ont déjà fait couler beaucoup d'encre chez ses commentateurs. Or, l'on tend à commenter distinctement ces deux concepts, ce qui cache l'existence même de ce problème qui est de savoir comment Foucault conçoit leur rapport. Tout au plus, on explique que un groupe d'énoncés constitue un discours. Pourtant, Foucault souligne lui-même dans *L'archéologie* que le rapport entre énoncé et discours n'est ni linéaire ni déductif, ce qui signifie que l'énoncé n'est pas l'unité fondamentale du discours. Notre problème sera donc de savoir comment les deux concepts se rapportent l'un à l'autre.

Afin de l'expliquer, nous commencerons tout d'abord par examiner chacune de ces deux notions ; la définition du discours par Foucault renvoie à ses études sur de différents savoirs historiques, tandis que son idée de l'énoncé reconduit à ses études sur la littérature moderne, dont notamment *Raymond Roussel*. Notre analyse sera ensuite consacrée à montrer que le rapport de ces deux concepts n'est ni causal ni déductif, c'est-à-dire que l'un ne fonde pas l'autre ; nous défendrons que leur relation nous semble plutôt *circulaire*. On voit en effet que l'un ne cesse de reconduire à l'autre. Cela dit, nous chercherons à montrer enfin que cette circularité n'est loin d'être paradoxale et défectueuse, comme l'affirment certaines études. Alors que ces deux ordres du langage, à savoir l'énoncé et le discours, se renvoient circulairement l'un à l'autre, ils se situent tous les deux à l'ordre de la « positivité » et même de la *productivité*, où ni le paradoxe ni le défaut théorique n'est à refuser. C'est à une telle idée que mènera notre réflexion autour du rapport entre ces deux concepts archéologiques.

同じものとしての生命—デリダ『弔鐘』読解を中心として

小川 歩人

本発表では、フランスの哲学者ジャック・デリダ(1930-2004)の『弔鐘』(1974)におけるヘーゲル読解のうち、とりわけ「生命」概念解釈を検討する。

近年、デリダのセミナー草稿研究、出版が進む中で、2000-2001年の「獣と主権者」講義、分子生物学者フランソワ・ジャコブの『生物の論理』解釈がおこなわれた1975-1976年の「生死」講義等を中心にデリダにおける「生命」論の重要性に注目が集まっている。そこでは、1974年の『弔鐘』における『大論理学』における「生命」概念の検討が前提とされていることはまだ検討が進んでいないといえない。

デリダは、『大論理学』最終部分を指標としつつ、「生命」を「固有なものをもたない自己への回帰」、「再自己固有化の円環」として捉える。そして、自然的生命から精神的生命、絶対的精神へと至るヘーゲル的体系が「生命の書物」として読まれうることを指摘する。しかし、その際、デリダは、思弁的弁証法の過程で、その移行段階が止揚されていきながらも、そこから零れ落ちていく「残余」を問題にしようとする。残余には、1)理念化、止揚され、弁証法にとりこまれるもの、2)落ちるがままになるものという二つの側面があり、この二重の関係がヘーゲル的生命に読み込まれていくこととなる。

この読み込みの際して、デリダはヘーゲル的フェティシズム読解に精神分析的フェティシズムを接合することにより、弁証法的体系から排斥されるものと、それらが再自己固有化される過程を再記述しようとする。ヘーゲルにおいて、フェティシズムは『歴史哲学講義』において、アフリカ黒人の宗教の特徴としてあげられており、彼の議論からは端的に排除されている。ここでは、フェティシズムは精神の歴史の外部でしかないのだ。しかし、デリダは、母のファルススの放棄を認めない否認という精神分析的フェティシズムの議論を接ぎ木する。これにより、デリダは去勢と勃起の二重の論理を可能にするフェティシズムの論理と、廃棄と保存を同時におこなう止揚の運動性の相同性をみてとる。一方で、このフェティシズムの倒錯的效果は、不在の対象の増殖を可能にすることで、思弁的弁証法、ヘーゲル的生命の全体性を毀損しつつ、その限界を再標記するが、他方で、止揚されえないものをそれでも内化し、理念化せんとする絶対知の強力なファンタズムを明らかにする。ここにおいて、絶対的外部性としての他者とは異なった、自己固有化を繰り返すファンタズムと絡み合った生命の暴力と他性との関係が捉え直される。

この問題はさらに、石から植物へ、動物から人間へという弁証法における移行をあつかうことにより、80年代以降のデリダの大きな主題であるハイデガーの『形而上学の根本諸概念』における石—動物—現存在をめぐる三つのテーゼ解釈を準備するものでもある。

『アンチ・オイディプス』における「コード」と「負債」の意義

木元 竜太
(大阪大学大学院)

ドゥルーズ＝ガタリは、精神分析、人類学、経済、国家論などを扱った書物『アンチ・オイディプス』(以降AOと表記)を書き上げた。この著書は、一つの分野だけにとらわれないことにより、柔軟かつまったく新しい見解をそれらの各分野に示すことに成功している。しかし、この『AO』によって提示された内容を各分野の立場から精査し、それらを体系的にまとめていくという作業が十分になされていないことも事実である。この作業はドゥルーズ＝ガタリがまさに批判する点ではあるが、彼らが語ろうとしたことを体系的にまとめる過程をいったん経て、はじめて『AO』の良さが理解できると発表者は考えている。

この発表では、その体系的にまとめるという作業をおこなうために、『AO』から、まず「コード(code)」という一つの様式を取り出す。「コード」は、人類史の中のあらゆる場面において出現し、人々の行動や精神を縛り、一定の方向へ秩序立てていくものである。「コード」が、法、慣習などの意味などを含んでいるのはもちろんのことであるが、『AO』では、「コード化」が、「脱領土化(déterritorialisation)」や「オイディプス化(oedipianisation)」と言い換えられているようにも思える。だが、「脱領土化」は大地との関係の文脈で、「オイディプス化」は精神分析との関係の文脈で使用されている。また、この「コード」に注目することによって、「コード化」の運動と、専制君主、近代の主体、国家、資本主義との関係を、整理することができる。

さらに、「負債(dette)」概念にも注目した。ドゥルーズ＝ガタリは、ニーチェの『道徳の系譜』に言及し¹、この「負債」概念こそが、人類史を貫く根源的な様式であると断言する。今村仁司の『交易する人間(ホモ・コムニカンス)』を参照することによって、モースとレヴィ＝ストロースの交換の原理の考察を整理し、「負債」がなぜそれらよりも根源的であるか、ということを示すことができる。

最後に、「コード」と「負債」がどうつながっていくのか、「負債」がなぜ『AO』の核心となるのか、という点について論じる。「負債」は「コード」の根源的な動力であるとともに、近代の主体の成立に大きく寄与している。その主体の成立の過程は、精神分析におけるオイディプス化の話と密接に関係するものである。ゆえに、「負債」概念を明瞭化することは、『AO』の核心である精神分析批判を読み解くうえで、重要な鍵となるものである。

¹ Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'anti œdipe : Capitalisme et schizophrénie*, Paris, Minuit, 1972, p.228

独話の対話構造における三人称の機能について ——幻聴における主体の自己構成の問題

本間 義啓

本発表の目的は、聴声経験についてのラカンやフロイトの分析をもとに、主体の自己構成をその失調の可能性から捉えることにある。いかにして幻聴主体は自らのエゴを崩壊したものとして経験しているのか。あるいは、どのように崩壊の相のもとに自己を構成しているのか。このような問題に取り組むために、セミナー『精神病』等でラカンが行った、言語活動の障害における発話主体の自己性についての分析を考察したい。

ラカンの考察の出発点は、主体は、幻聴に教われるとき、自分の発話を聞いているという事実である。言語性幻覚において問題になるは、この自らの発話を自らのものとして感じるができない、「発話を強いられている」と主体が感じることである。たとえば「おまえは～だ」と言う他者の声を聞く。しかし、それが幻聴である限り、この「おまえは」と言う主体は他者ではなく「私」であり、それは、自らのものとして引き受けることができない主体自身の発話なのである。このように言語性幻覚は、「発話行為の人称的枠組み」（バンヴェニスト）、つまり、対話構造の崩壊として現れていることになる。通常、発話主体は一人称で語る主体として二人称の他者に対して語り、あるいは一人称で語る他者の発話を二人称として聞く。しかし、たとえば命令幻聴においては、主体は自らに対して二人称で語りつつ、この自らの語りを他者のものとして受け取るのだ。セミナー『精神病』の記述をもとに、このような「発話行為の人称的枠組み」の変容における主体の自己構成を考察することが、本発表の課題の一つである。

第二の課題は、幻聴における三人称の機能について考察することである。パラノイアにおける妄想において、主体は三人称で名指され、観察されていると訴えることが多い。ラカンは次のように言う。「[言語性幻覚]が現実界において現れるとき […] 主体は文字通り自分の「私」と話しているであって、それはあたかも第三者や分身が話していて、自我の行動を注釈しているかのようである」。注察妄想において、「私」は自らを「おまえ」としてではなく他者によって監視、批判される「彼（女）」として構成している。興味深いのは、ラカンが、この第三者としての「私」の構成を、「私」が「自分の自我と話す」ことによって生じると示唆している点である。バンヴェニストによれば、三人称は対話の外にいる否-人称（対話する「私」でも「おまえ」でもない誰か）であると言っていた。ここから次のように言えるかもしれない、自分の話を聞く幻聴主体は自らを三人称として構成するとき、自らの発話を自分自身から完全に乖離したのものとして受け取っているのではないかと。この仮説を論証するために、ラカンあるいは別の精神分析家による迫害妄想の症例の読解を行いたい。

ガブリエル・タルドにおける信念と欲望

笠木 丈

（フランス国立社会科学高等研究院 博士課程）

本発表で取りあげるのは、通例社会学者として位置付けられる思想家、ガブリエル・タルドにおける主要概念、信念（*croyance*）と欲望（*désir*）である。立場を異にしていたデュルケムとの論争の末にタルドは社会学のメインストリームから外へ追いやられ、もっぱら社会心理学や群衆論の文脈でのみ語られてきた時期が長く続いてきたと言ってよい。そうしたなか、ドゥルーズによる再評価が契機となって、タルドの思想のなかに秘められている射程がふたたび注目され、マウリツィオ・ラッツァラートらによって現代的な活用が試みられてきた。だが、そのうえでもなお、タルドの用いる諸概念についての哲学的な吟味はいまだ十分に着手されていない状況にある。社会学者と見られてきたタルドは実は哲学的な前提をその思想の基盤として議論を行っているが、先行する研究においては、哲学者としてのタルドについて未解明な状況であると言える。

タルドがその議論の中核に据える信念と欲望という概念もまたそうした哲学的考察を求めるもののひとつである。タルドにおいて、信念と欲望は一方では諸個人の内的な信念と欲望を構成するものでもあるが、それはたんなる心理的な要素という位置づけにはとどまらない。それは、タルドの存在論そのものを構成しており、タルドによればこの世界そのものが信念と欲望によって構成されているのである。信念と欲望は諸個人のあいだでたがいに交わされる力であるが、それらが諸個人を貫流することができるのは、そもそもそれらの力が個人を超えて存在しているからである。このような、信念と欲望という力のダイナミズムが、模倣によって形成されるタルド的な意味での社会を形成するのであるが、このような意味で、信念と欲望はまさにタルド社会学の成立基盤となる概念なのである。

こうした信念と欲望について検討するために、本発表では、信念と欲望について原理的な議論を展開している諸テキストを検討する。信念と欲望については、論文「信念と欲望——その測定可能性について」がよく知られているが、ここでの議論を踏まえつつ、『普遍的対立』の第六章およびピラン論である『メヌ・ド・ピランと心理学における進化論』を検討する。特に、ピラン論において、ピランの議論を換骨奪胎しながら力の概念を練り上げていく過程である。タルドはピランから内的な力としての努力の側面を引き受けつつも、そうした内的な力が交錯するものとしてこの世界を描き出そうとするのである。私には還元されえない、私を超えたものとして内的な力を位置付けるということ。タルドの、信念と欲望の存在論はこうした思考を通して練成されたものであるということを明らかにすることを本発表は試みる。

イマージュについて：『物質と記憶』第一章再読

岡嶋 隆佑

『物質と記憶』（MM）第一章でベルクソンが提示した「イマージュ」という概念をめぐるのは、同書の公刊から現在に至るまでさまざまな解釈が提示されてきた。本発表は、豊富な研究の蓄積を利用しつつ、この概念に対し今一度可能な限りテキストに即した解釈を与えることで、MM第一章の議論の全体像の素描を試みるものである。

次の順序で議論を行う。まず（1）先行研究の整理を通じて、イマージュ概念およびMM第一章の解釈にかんする問題の所在を明らかにする。その上で、（2）テキストを詳細に検討することによって、「混合物」としてのイマージュという解釈を提示し、同章の議論がどのように読まれるべきかを明確にしたい。より具体的には以下のような議論を予定している。

（1）イマージュ概念の有力な解釈方針としては、存在論的なもの（Deleuze, Montebello等）と現象学的なもの（Goldschmidt, Prado, Riquier等）を区別できる。前者によれば、イマージュとは、認識から独立にそれ自体で存在する対象である。この立場には、MM第一章の記述を文字どおり理解できるという利点があるものの、その議論を擁護不可能な素朴實在論にしてしまう恐れがある。反対に後者は、イマージュ概念が、対象の現実存在を括弧に入れる（現象学的還元類似した）機能を担っていると指摘する。こうした読みは、ベルクソンの議論を強固なものにできる点で有用であるが、同章全体で存在定立を括弧に入れることによって、そこに實在論を見ることが難しくなるという困難を抱えている。要するに、同章のこれまでの解釈は、實在論をとって議論の強さを捨てるか、その逆かというジレンマ的な状況にある。

（2）しかし、ベルクソン自身の示唆に従って、常識の視点と常識を考察する理論の視点とを区別するならば、MM第一章を一定の妥当性を有する實在論として読むことができる。われわれによれば、存在論的解釈が強調するイマージュの即自性についての記述は、「常識の素朴な確信」を表現したものであり、この確信を考察する理論の視点からすれば、イマージュは決して即自存在ではない。なぜなら、イマージュは、同書第一章や第七版序文での注釈において、主体に由来する記憶や情動を含んだ混合物として描かれているからである。とはいえ、現象学的解釈が言うように同章が實在論的な主張を提起していないわけでもない。というのも、イマージュは、記憶や情動に加え、物質そのものの部分としての純粹知覚を含んでおり、これこそが上述の「確信」の起源を成すものだからである。このように考えるならば、同章の議論は、混合物としてのイマージュが、純粹知覚、記憶、そして情動の三つの要素から構成されていることを示すものだと理解することができる。

デカルトにおける〈欺かれる私〉について ——欺かれるという事態から何が帰結するのか——

田村 歩
(筑波大学大学院)

人間が神によって創造されたならば、換言すれば、人間の存在が神に依拠するならば、人間知性の真正さもまた、その創造主たる神に依拠することとなるだろう。ではその神が、人間を創造したはいいが、しかしその知性を常に誤るものとして創造していたとすればどうなるか。この事態こそデカルトのいわゆる方法的懐疑における最大のものである。以下のデカルト『省察』からの引用は、欺瞞者の想定によって懐疑が最も深化される箇所であり、本研究において最も重要となるテキストである。

「しかし私は、世にはまったく何もものない、天もなく、地もなく、精神もなく、物体もないと自らを説得したのである。それならば、同じく私もないと説得したのではなかったか。否、そうではない。むしろ、私が自らに何かを説得したのであれば、私はたしかに存在したのである。しかしながら今、誰か知らぬが、極めて有能で極めて狡猾な欺瞞者がいて、策をこらし、いつも私を欺いている。それでも、彼が私を欺くのなら、疑いもなくやはり私は存在するのである。欺くならば、力の限り欺くがよい。しかし私が自らを何ものかであると考えているあいだは、決して彼は私を何ものでもないようにすることはできないであろう」(Medit., AT-VII, 25.)

このようにデカルトは、天も地も精神も物体も、そして私さえも存在しないと自らを説得することで、また、極めて有能かつ狡猾な欺瞞者が私を欺いていると想定することで、〈私〉の存在を逆説的に論証した。このような説得行為ないし欺瞞者の想定による〈私〉の存在の導出に関しては、すでに多くの先行研究によって論じられているとおりである。そしてそれらを遡行すればただちに理解されることだが、欺瞞者の想定によって〈私〉の存在を導出しようとする議論は、欺瞞の作用とその対象という関係性をもとにして欺かれる対象としての〈私〉の存在を導出するためのものであるとする解釈が主流であった(たとえば GOUHIER, KENNY, PARIENTE の研究)。

しかしこの論法において、欺くものが欺くためには欺かれるものが存在しなければならないという事物間の関係が述べられていると解釈するならば、それは「殴るものが殴るためには殴られるものがいなければならないというのと大して変わらない」(上野修「コギトの確実性：様相の観点から」、『メタフシカ』、2004年)と思われる。そこで本研究では、従来の解釈には従わず、「欺瞞」という行為そのものに注視することによって、1) 欺瞞者の想定から導出されるのは〈私〉の存在ではなく「思惟」であるということ、さらに2) そこで導出される「思惟」には、後に定義される「理解し、肯定し、否定」する能力が認められるということを論じたい。

物語論と人生全体満足説 ——リクルの自己の解釈学からの視点

長門 裕介

『時間と物語』第三巻の末部において、リクルは同書でそれまで展開されてきた物語論と歴史的意識の現象学を総括しつつ「物語的自己同一性」というアイデアを提示している。これは、自己同一性の問題は数的な同一性だけでなく「あなたはどのような人間であるか」という『『誰？ qui』の問い』にも関わるものであるとした上で、私たちの自己理解は経験の有機的な統一（統合形象化）を媒介にして行われると主張するものであった。つづく『他としての自己自身』においても、このような「自己の解釈学」をもとにして、リクルはストローソンやパーフィットといった英語圏の哲学者の自己論に対するオルタナティブがありうることを論じたのである。

しかし、現代の哲学において有機的に統一された経験の諸相、あるいは「物語 narrative」の概念に着目して議論を進めるのはなにもリクルの専売特許というわけではない。自己同一性の問題においてはマッキンタイアや彼に強い影響を受けたシェクトマンなどが有名であるが、注目したいの価値論・幸福論におけるサムナーやヴェレマンといった哲学者が主張する「人生全体満足説 Whole Life Satisfaction Theory（以下「WLS説」とする）」の隆盛である。

WLS説とは、端的に言えば幸福を人生全体の満足として捉える立場である。WLS説は基本的にはある時点切片において生じる瞬間効用を集計することによって幸福を定義する古典功利主義的な価値論と（多くの場合）対立する立場として捉えられるが、その最大の特徴として幸福判断に時間的性格を持ち込んだことにある。例えば、ある時点 t_1 に得られた効用に関する評価ががそれよりあとの時点 t_2 においては別の評価が下されることもありうる、といったようにである。このような経験の時間的な配置ないし分配パターンを含めた統一的で有機的な生の構造を考慮に入れて幸福を解釈することをリクルやマッキンタイアが使うような意味での「物語的」と表現することはそれほど不自然ではないだろう。

しかし、WLS説には多くの難点があると指摘する論者も多い。彼らはWLS説は(1)人生全体とは果たしてどこからどこまでなのか(2)評価主体は時間軸上のどこから評価を行っているのか、のそれぞれについて理論的困難が生じると考えている。この批判にいかにして応えるかがWLS論者にとっての目下の課題である。

以上の経緯から、本発表では(1)リクルの「自己の解釈学」や物語的自己同一性のアイデアはWLS説との強い親和性があること(2)主に『他としての自己自身』で展開された実践的判断についての道具立ては、WLS説に対する批判に応えるための有力な理論的基礎を提供するものであること、の二点を示そうと思う。

初期ドゥルーズにおける情念と自己知について

得能 想平

ドゥルーズは、自身の哲学の出発点と位置づける『差異と反復』や『意味の論理学』の著作を出版する以前に、哲学者及び小説家についてのモノグラフィーを多数著していた。ドゥルーズは一方でこれらを徒弟時代のものとしながらも、他方でこの著作のあいだに、彼自身にとっての「内密なつながり」を見だしていた。本発表の目的は、情念と自己知という論点に注目することで、これらモノグラフィーのうちのつながりの一端を明らかにすることにある。

ドゥルーズ哲学において、自己知の対象は差異として定式化される。ドゥルーズは周知の通り、存在すること、認識すること、活動すること、生成すること、これらを満たす充足理由として差異を規定した。本発表は、われわれがそのような自己自身の充足理由を認識することを自己知と呼び、その方法を情念という論点を起点として考える。

大枠となる議論は『スピノザと表現の問題』のうちに見られる。ドゥルーズは、この中で、自己知としてスピノザの第三種認識を問題とし、情念と関係づけながら、その条件としての第一種及び第二種認識を論じている。本発表は、第一にこれらが論じられる『スピノザと表現の問題』の第一八章及び第一九章の議論を再構成することで、自己知へと向う認識の段階、およびその認識と快楽の関係について確認する。

『スピノザと表現の問題』の議論を参照することで、認識の区別は快楽の区別に対応していることが確認される。そしてさまざまな快楽や苦痛から、どのようにして自己知が形成されるかという問題は、臨床の問題として他のモノグラフィーにおいて探求されている。われわれは、第二に、『経験論と主体性』、『プルーストとシーニュ』、『マゾッホ紹介』、『ニーチェと哲学』などに見られる議論を参照することで、自己知の観点から結びつくさまざまな情念と認識の関係についてドゥルーズが挙げる事例に沿って確認する。

本発表の結論は情念と結びついた形でドゥルーズによって探求された自己知は、その出発点を裏切るような形で「脱人称化」に至るということである。この自己知の脱人称化というテーマは、『差異と反復』以降のすべての著作において見られ、多くの論者にも指摘されてきたものであるが、これまでの研究においてこのテーマ自体が所与のものとして扱われているところがあり、ドゥルーズがどのような観点から、どの程度まで主体の脱人称化を論じたのかは明らかにされてこなかった。ドゥルーズのモノグラフィーにおいて、自己知と情念の観点から構築される脱人称化の哲学を明らかにすることが本発表の成果となる。

「原イメージと反イメージ——メルロ＝ポンティとドゥルーズ」

小林 徹
(慶應義塾大学)

本発表は、モーリス・メルロ＝ポンティとジル・ドゥルーズの思考を手がかりに、現代社会におけるイメージの本性を理解することを目標とするものである。

現象学的アプローチに従えば、イメージを生み出す働き(想像力)は、知覚と並ぶ意識の根源的機能である。何ものにも支えられないイメージの純粋な発生において、私は想像する意識となる。ジャン＝ポール・サルトルが述べているように、私たちはイメージを受け取るのではなく、イメージを存在するのだ。この純粋な無化作用は何処に生じるのだろうか。メルロ＝ポンティはそれを知覚の働きに、そして〈存在〉の差異に求める。私たちは意識である以前に身体であり、イメージとは、身体がその一部である〈存在〉の自己展開そのものなのである。意識における個別的なイメージの生成に先立って、いわば「原イメージ」の湧出と呼ぶべき事態が生じていると言えるだろう。

イメージは誰かのために生み出されるのではない。イメージの存在は、私たちの把握能力の外部に留まる。原イメージの湧出は、いかなる中心化作用をも逃れる純粋な自己俯瞰運動でなければならない。ドゥルーズは、知覚し想像する主体の外部に回帰する「反イメージ」の位相を明らかにしたと言えるだろう。彼の映画論に見られる運動イメージから時間イメージへの展開は、イメージの生成変化を純粋な差異(〈時間〉)へと決定的に接近させる。このとき〈存在〉の感覚的差異とは位相を異にする、出来事の理念的差異が問題となる。イメージの生成は、〈存在〉の表現であると同時に〈時間〉の成就であり、そこにはつねに、原イメージの実現に逆らう反イメージが潜在的に回帰しているのだ。

原イメージと反イメージの哲学は、イメージの分類学を超えて、生まれつつあるイメージそれ自体の革新性を掘り起こすものである。たしかにイメージを思い浮かべるということは、ある制度に所属することである。そして所属するということは、所有されることである。イメージは制度に利用され、徹底的に消費される。しかしイメージはまた、制度による所有に内部から抵抗する道でもある。イメージの発生において、私たちは閉じた全体性への利害関心から離脱し、既存の構造にけって回収されることのない純粋な出会いを果たす。現代のイメージ論は、〈存在〉の厚みを手放すことなく、その外部の〈時間〉を語ることによって、イメージが生まれるこの真に革新的な瞬間を捉えるものでなければならないだろう。

『全体性と無限』における社会性について ——意味作用の時間性との関連から——

犬飼 智仁
(明治大学)

エマニュエル・レヴィナスの第一の主著『全体性と無限』（1961）には、社会性（socialité）、社会（société）、社会的……（social）という言葉がしばしば用いられているものの、実際のところ、どのような社会が描かれているのかは判別しがたく、概念化されているとも言い難い。社会性が、なんらかの仕方では他人との関係を指示するという点に異論はないだろう。しかし、いかなる意味において社会性、社会という言葉は用いられているのだろうか。レヴィナスは、その特権的なあり方を同書第三部の言語論のうちに見ているが、主体の内部性が主題となる第二部の享受論、「顔の彼方」と題された第四部のエロス論においても、社会性ないし社会という言葉を用いている。

本発表の目的は、『全体性と無限』における社会性を時間的な諸相を軸に考察することである。社会性を時間性という観点から分析することによって、他なるものとの関係としての社会というあり方を『全体性と無限』の各チャプターに対応する仕方でも分節し、それによって各チャプター間の関係を明らかにすることができるだろう。同書においてレヴィナスは、多元的な社会そのものを主題として記述するよりも、個々の出来事に焦点を当てているが、本発表は、むしろそれらの出来事の背景にピントを合わせる作業である。

本発表では、『全体性と無限』の構成に関して次のようなことを示したい。『全体性と無限』第四部が「顔の彼方」と言われるのは、第三部の議論が「他人の現前」における発話、他人の啓示という観点から論じられているためである。ただし、このことは、第三部の議論が、第四部に比して非本質的であるとか、また第四部の議論が第三部の議論を「乗り越えた」位相にあるということの意味しているのではない。そうではなく、第三部の議論が、他人との対面関係における発話をつうじた意味作用（signification）の発生という特権的な出来事を記述しているのに対して、第四部の議論は、第三部の言語的関係への対応を失うことなく、繁殖性という時間的な側面から社会性を記述している。繁殖性の議論は『実存から実存者へ』、『時間と他なるもの』の頃にも見られるが、言語の問題は主題として論じられることはほとんどなかった。では、『全体性と無限』の言語の問題は、繁殖性、「顔の彼方」に対していかなる関係を有しているのか。

以上の問題を検討するにあたって、近年公刊された『レヴィナス著作集』や、第二次世界大戦以降に書かれた『実存から実存者へ』、『時間と他なるもの』との関係も考慮に入れるつもりである。それによって、戦時中から『全体性と無限』出版にいたる時期までのレヴィナスの関心の中心のひとつとして社会性が浮かび上がってくるだろう。

「聖／俗の区別／両義性」

佐々木 雄大

「聖なるもの」は一般的に、宗教を規定する本質的な概念であると考えられている。宗教は、聖と俗との絶対的な区別を含み、聖なるものは、俗なる領域から排除・隔離されているがゆえに、神聖と汚穢、浄と不浄といった両義性として世俗の人間に対して現象する。こうした聖・俗の区別と聖なるものの両義性という考えは、デュルケム学派からカイヨワを経由してエリアーデへと到る思想的系譜の中で支持されてきた。

これに対して近年、とりわけ宗教概念批判の文脈において、宗教を「聖」観念や聖・俗二元論によって定義することに対して、数々の疑義が突きつけられている。それはつまり、超自然的な聖と自然的な俗という対立は近代的な発想にすぎないこと、デュルケムの「聖」観念は第三共和政における世俗化と市民宗教の企てを背景として構築されたものであること等である。こうした批判に従うならば、聖・俗二元論によって宗教を特徴づけようとする立場は、歴史的な概念を普遍化し、それをレトロスペクティブにあらゆる宗教へと当てはめようとする錯誤に陥っていることになるだろう。そしてまた、こうした批判は、デュルケム学派の影響の下で宗教について考究し、「聖なるもの」を自らの思考の鍵概念としていたバタイユにも向けられざるをえない。事実、バタイユが聖なるものの両義性をカイヨワから無批判に取り入れたと、アガンベンが批判するのである。

しかしまた、聖なるものをめぐる議論に関しては、バタイユのテキストに内在的な問題もある。バタイユは一方で、初期の異質学草稿や社会学研究会において、聖と俗との絶対的な異質性や聖なるものの両義性といった、デュルケム学派的な「聖」観念に基づいて、聖なるものの思考を展開していた。しかし他方で、後年の書評「戦争と聖なるものの哲学」においては、聖なるものと俗なるものとは本質的には異なったものではなく単なる視角の違いにすぎないと述べ、あたかも聖・俗二元論を放棄したかのように思われる。だとすれば、バタイユの「聖なるもの」の思考には転回があったのだろうか。それとも、こうした見かけ上の変化にもかかわらず、その基底に何らかの一貫した聖なるものの論理があるのだろうか。

本発表の目的は、このようなバタイユの聖・俗二元論に対する態度変化の問題を読み解くことを通じて、近年の「聖」観念批判から、その「聖なるもの」の思考を救い出すことにある。本発表ではまず、バタイユの聖なるものを理解するのに資する限りにおいて、デュルケムやカイヨワらの聖・俗理論を確認する。次に、異質学草稿や社会学研究会といった初期のテキストに基づいて、バタイユがどのように「聖」観念を受容し、聖と俗との区別、聖なるものの両義性の意味を検討する。そして最後に、後期の書評「戦争と聖なるもの」にしたがって、聖・俗二元論を超える「聖なるもの」について考察する。

スピノザのデカルト『情念論』批判 —『エチカ』第5部序言の分析を中心に—

笠松 和也

スピノザは主著『エチカ』第5部序言で、デカルト『情念論』を取り上げてこう論難する。「もしその見解がそれほど鋭いものでなかったとしたら、私はあれほどの人からこうした見解が出てきたとはほとんど信じなかったであろう」。『エチカ』の中では、スピノザは個別の哲学者の名前を挙げて批判することはめったにないが、第5部序言では例外的にデカルト批判が詳細に展開される。この批判にはいかなる意義があるのだろうか。

一般的にはデカルトの心身問題に対する批判として受け取られているように思われる。実際、第5部序言には松果腺や動物精気に対する批判が見られるからである。スピノザ研究者のジャケも、第5部序言全体を心身関係論として読んでいる。しかし、デカルト批判がストア派批判と並べられていることや、感情に対する精神の「絶対的力能」への批判の中で松果腺や動物精気が取り上げられていることを考えるならば、このデカルト批判は心身関係論の枠内に収まるものではないといえる。本発表では、第5部序言を一つのまとまったテキストとして分析することを通して、デカルト批判の意義を取り出すことを目指す。

はじめに、第5部序言を内容上五つに分節化する。[A] 第5部の内容の位置づけ、[B] ストア派の見解とそれに対する批判、[C] デカルトの見解、[D] デカルトの見解に対する批判、[E] 結び、の五つである。さらに、[D] の中には、(a) 心身合一の問題、(b) 松果腺の運動の程度の問題、(c) 自由意志の問題、の三つが含まれる。本発表においては、とりわけ [C] と [D] の分析が中心課題となる。

[C] において、スピノザは『情念論』第1部の内容を次の三段論法に再構成する。諸情念は魂の知得、感覚、情動であり、それらは特に魂に帰されるのだが、何らかの精気の運動によって産出され、保存され、強化される（大前提）。ところで、われわれは松果腺のどんな運動とも、したがって精気のどんな運動とも、任意の意志を結びつけることができ、また意志の決定はわれわれの力のみ依存する（小前提）。ゆえに、われわれは自らの諸情念に対する絶対的な支配力を獲得する（結論）。[D] で挙げられる三つの問題は、小前提に対する三つの批判として捉えられる。

『情念論』と比較する場合、重要なのは (b) の問題である。これは単に心身の相互作用だけに関わるのではなく、力の比較に関わる。デカルトは松果腺を動かす傾向力どうしの比較を論じたが、スピノザはデカルトのいう「習慣」を表象の問題として捉えることで、精神の力能と外的原因の力を比較する次元を切り拓く。これは、のちにスピノザが『政治論』で、「自己の権利の下にある」と「他者の権利の下にある」を区別する文脈へと続く。ここにおいて、感情論は政治論に接続されることになる。

リクール倫理学はグローバルな正義について 何を言うことができるか

川崎 惣一
(宮城教育大学)

近年、グローバルな正義をめぐる議論がさかんになされている。その背景としては、主として政治と経済のグローバル化が進展するのにもない、とりわけ国家間での貧富の格差がいつそう固定的なものとなっているという事態がある。ここから、グローバルな正義の観点から貧困の問題にどのようにアプローチしていくことができるかについて、法哲学や倫理学の分野において、さまざまな議論が行われている。

さて、リクールは1990年代を中心に、正義および「正しきもの (le juste)」をテーマとする数多くの論考を残しているが、このリクールの正義論を足掛かりにして、上記のようなグローバルな正義をめぐる議論にどのような貢献ができるか、これを探るのが本発表の目的である。

リクールは、ロールズの『正義論』にいち早く注目し、ロールズの正義論を意義あるものとして受け止めると同時に、それを自らの哲学的考察の文脈のなかに位置づけていくという形で、自身の正義論を展開している。

リクールはロールズの正義論を、「無知のヴェール」というフィクション的状况においてとられるもっとも合理的な選択からなる手続き的正義として特徴づけたうえで、カントに代表されるような義務論の一つとみなしている。そのうえでリクールは、ロールズが、各人に最低限保証されるべきもろもろの「社会的な基本財」について、それらの「基本財」同士の衝突に目を向けておらず、そうした衝突を解決していくなかで「もっと具体的な正義の観念」(『レクチュール』)が必要になるであろうことを指摘し、さらに、正義に関するロールズ的な論じ方においてさえも「正義についての基本的な考え」(『他者のような自己自身』)が必要になってくると指摘している。

これらの指摘から、リクールは、ロールズ流の手続き的正義においても結局は「善き生」についての根本的な洞察が土台になっているのだ、という考えを持っていたことが分かる。

リクール自身の「善き生」に関する着想は、彼が『他者のような自己自身』(1990)の中で提示した「私の小倫理学」、すなわち「正しい制度において、他人とともに、また他人のために『善い生き方』をめざすこと」にはっきりと示されており、これがリクールの正義論の要をなすものであるが、ここからグローバルな正義をめぐる諸問題に対して、どのような応答が可能となるのだろうか。

今回の発表では、この点についての一定の見通しを示したいと考えている。

アロンによるフーコー批判 — 規範と認識の観点から

宮代 康丈

1967年、レイモン・アロンとミッシェル・フーコーは『言葉と物』の出版を機に討論をおこなった¹。既に邦訳もあるこの討論について、フーコー研究の一環として位置づける論評は国内外で幾つか発表されている。しかし、アロンが提起した論点や、両者の対決が持つ哲学上の射程は十分に理解されているだろうか。本発表の目的は、アロンの歴史哲学全般を踏まえつつ、この討論で提起されている規範上の、また認識論上の争点を詳らかにすることである。

フーコーに対するアロンの批判の要点は次の二つにまとめられる。すなわち、人間科学と哲学の関係、およびパースペクティヴィズムである。どちらについても着目すべきは、アロンの批判の土台にカント哲学の継承があるという点である。

1. 人間科学と哲学の関係について、アロンによると、客体としての人間と主体としての人間との分離がもたらすのは、主体をめぐる哲学の再定位である。主体の哲学は、人間科学の登場によって消失するのではなく、その領域を越えた所に位置づけ直される。哲学は、「定められた運命を超えてその方向性 [=人間が今後向かうべき道] を探」という規範的問題をこそ、自らに固有の領域として引き受けるのである。この展望の背景にあるのは、理念の統整的使用という批判哲学の着想に基づきつつ人間の歴史性を捉えるアロンの国家博士論文以来の枠組みである。

2. 認識論上の論点については、フーコーの方法論を突き詰めると、完全なパースペクティヴィズムに陥らざるを得ない。ところが、その普遍妥当可能性は独断的に、つまり無批判的に主張されている。エピステーメ間の不連続性を主張するためには、自らの思考を規定している（はずの）特定のエピステーメを超出し、各エピステーメの相違を比較する必要があるが、しかしそうした超出の可能性はパースペクティヴィズムの主張と矛盾する。そこで、「あなたは、ご自身をどこに位置づけていらっしゃるのでしょうか？」というアロンの問いが出てくる。ただし、行為遂行的矛盾の指摘に類するこの議論には、「多様な解釈」の可能性という争点も伴う。否定しがたい解釈多様性を認めつつ、認識の普遍妥当可能性を確保することはいかにして可能か。この問題について、私は何を知りうるかというカントの問いを歴史的客観性の限度のそれとして捉え直したアロンの哲学を押しえつつ、フーコーに対する批判の射程を本発表では明らかにしたい。

¹ Raymond Aron et Michel Foucault, *Dialogue*, Paris, Nouvelles Éditions Lignes, 2007 (ミッシェル・フーコー『レイモン・アロンとの対話』、西村和泉訳、水声社、2013年)。本文中の引用はすべて邦訳からのものである。

大他者の欠如と対象 a ——ジャック・ラカンによる『ハムレット』註釈の理論的意義——

桑原 旅人
(東京大学博士課程)

ラカンは、「欲望のエネルギー」が引き起こすその帰結を悲劇に見いだしている。その分析の端緒となったのが、一九五七年から五八年にかけて行われた講義録『欲望とその解釈』における『ハムレット』註釈である。それは単なる戯曲の註釈に留まらず、彼の理論の重要な転回点になっている。本発表はこの講義録を内在的に読解することによって、その理論的な意義について論じることを目的とする。

まず重要であるのは、『ハムレット』註釈を重大な一つのきっかけとして、『無意識の形成物』までは主体を安定化させるための有効な機能としてその力が信じられていたように思える「大他者のなかの大他者」としての〈父の名〉が、ラカン理論において主体の欠如を補うことのできる絶対的な真理の位置からは格下げされたということである。その結果、「あらゆる真理が人を欺く」ようになる。なぜなら大他者に欠如が存在するということは、それが普遍的なものを主体に提示できるような応答をもっていないということの意味してしまうからである。大他者に斜線が引かれること(A)で、主体は唯一のものとはけっして断言し得ない部分的な真理しか発見できなくなる。

またもう一つ重要であるのは、この講義録から本格的に「対象 a」がラカン理論に導入されたことである。そしてここで、それはオフィーリアと共に語られる。ハムレットはオフィーリアと関係することによってはじめて、ラカンが「幻想 (\$◇a)」と呼ぶものを構成する。この小文字の a は対象であり、それは去勢された主体 \$ が占領することのできない場に欠如の代補的な役割として布置されるものである。

「対象 a」は、実在以上に崇高化された存在として機能する。死してこのオフィーリアは、「彼女がそうであるのとはもはや一致しない絶対的な存在感をもつ」ようになる。フロイトは喪における対象への同一化と体内化を問題にしていたが、ラカンによれば、愛する者の死に代表されるようなもっとも耐え難い種類の対象喪失は、「現実界の穴」をつくる要因となる。オフィーリアの自殺が現実界に穴を穿つことによって、ハムレットは現実的なものの力を流用できるようになる。そして、オフィーリアの死を対象 a として受け入れることで、鬱屈していたハムレットは感情を解き放ち、仇敵クローディアスに刃を向けることができる。

主体が対象 a に最も接近できるのは、主体にとってそれが失われたように思える瞬間であり、この逆説にこそ「欲望の悲劇」があると言える。

本発表では、上記のような理路に従って、「大他者の欠如 (A)」や「対象 a」といったラカン独自の理論装置の端緒が、『欲望とその解釈』におけるハムレット論にあったことを明らかにする。

後期デリダにおけるハイデガーの遺産相続(1) ——「ハイデガーの耳」と責任、贈与

大江 倫子

デリダの1989年のシカゴでの講演「ハイデガーの耳」は、ハイデガーを直接主題化する少数のテキストの一つであり、いわゆる倫理的転回の起点の時期にあって、直後の諸テキストで展開されその後の政治的言説にも活用される諸概念、正義、責任、贈与、来たるべき民主主義などが初めて言及されていることから、そのハイデガーへの負債が直接読解できる重要なテキストである。また参照されるハイデガーのテキストは『存在と時間』から晩年の講演まで多岐にわたっており、デリダの既刊著作中ハイデガーのテキスト件数が最多の著作の一つでもある。本稿では講演に沿って、『存在と時間』の「友の声」の存在論的分析から連鎖的にこれらの諸概念へ導入するデリダの戦略を読み、これらの諸概念の存在論的含意を確認した上で、ハイデガーのテキストを分析するとともに、直後のテキストでの展開を検証する。

講演は4章からなり、第1章ではとくに『存在と時間』に付随的に出現する「友の声」という語句に着目し、その存在論的意味作用を3項目で説明しようとする。その第2項としてハイデガー晩年の講演「言葉」との連続性を示しつつ、事物を調え与える世界、その贈与を性起させる「区別」、世界と事物を集結する力としてのWaltenの意味作用へと接続する。

第2章では同じ声の聴取の含意から、ハイデガーの最晩年のフランスでの講演「哲学とは何か」が参照される。ここでハイデガーは哲学を聴取として規定し、受容と解体としての固有化のプロセスとして再確認するのだが、ここで使用されるEntsprechen(言い応ずる)について、デリダは応答することとして責任の条件であると解する。しかしここでハイデガーが強調するかに見える調和に抗して、デリダは調和を乗り越えて異質性を尊重する「来たるべき民主主義」を主張する。またハイデガーの調和に前提されている二者の原初的接合が前提する正義を考察する。この原初的正義に対し「継ぎ目からの外れ」も聴取される。次に戦前最後の講義録『ヘラクレイトス』の「恵み与える」贈与に着目し、戦後の著作「アナクシマンドロスの言葉」の正義を与える贈与との呼応を示す。

短い第3章では、ハイデガーが『形而上学入門』でポレモスとロゴスを同一視する箇所注意到を向ける。

第4章ではこうしたポレモスの根源性に発して、責任、贈与、正義の両義的側面と、対立する二者の根源的統一waltenが検証される。

このようにデリダはこれら諸概念のうちに存在論的特性を聴取する。すなわちそれらは根源的なもの、アプリアリなもの、現前せずに力をふるうものである。このような特性がそのものとして現れるようにハイデガーのテキストを読解している。デリダがここで実践するのはハイデガー存在論の自己所有、適用の運動である。

良識ある人間が自然に行う単純な推論が書物より真理に近いのはなぜか — デカルトにおける真理認識の自然性についての一考察

佐藤 真人

本発表では、デカルトが『方法序説』までの哲学を構築する上で、自然・本性 *nature/natura* の概念が果たした役割を、デカルト思想の発展に沿って五段階で考察する。

まず『音楽提要』で「自然さ」が二面的に意識されている点に着目する。一方では拍や拍子、音についての算術比の考察など数学面から見た自然性であり、他方では自然に聴こえる音楽という感覚的観点からの自然性である。二つの自然性は中間項の概念によって統一が試みられるが（快の中間性など）、感覚の考察が不十分なために成功したとは言い難い。この点を自覚する若きデカルトは感覚の考察から一旦離れ、数学研究に専心する。

数学思想では、音楽理論に現れた算術比の考えを幾何学にも適用した点が注目される。これは一方で後の『幾何学』に見るように、コンパスの使用で容易に発見される幾何学的比例中項の理論へと発展するが、ここで重要なのは、中間項により二項を結合し、更に連続比例により全項を連結する理論的方法を発見した点と、連続量と離散量を相関的に表す方法を開発することで、代数学と幾何学の統一を目指した点である。『規則論』はこの方法を、知識の認識一般の「自然な」方法にまで拡大することになる。

数学の自然性の理論づけは『規則論』が明らかにした。第2規則が真理の規範とした数学の明証性の根拠は、数学が自然によって植えられた真理の種子から発展したこと、更にその認識方法の生得性にあることが第4規則で示された。次に、第1規則が言明した学問の連鎖を発見する方法の最も容易な例として、第6規則は比例中項による諸項の連結を挙げ、そのために発見すべき絶対的真理として第12規則は単純本性を挙げた。自然性が事物と認識方法の両面から真理一般に通底していることを『規則論』は示した。

次に、真理認識の基礎の研究において『真理の探究』が強調したのは、先入見にとらわれない自然な理性の働きに信を置くことであり、その働きを最もよく体現するのが自然の光である。他方、いわゆる永遠真理創造説において全真理の創造者としての神が初めて言及され、真理は我々の精神に生得的に植え付けられていることが示された。デカルトにとって基礎の探究とは、自然性がなぜ真理を保証し得るかの探究でもあった。

基礎の樹立後に行った物理学の研究でデカルトが目指したのは、物質界の自然法則による運航の解明であり、その知識と数学知識を基にした物質の利用である。物質的自然と我々の精神という異質な両者を、生得真理という自然性を介して関係づけることで、我々は初めて「自然の主人にして所有者」になることができる。

以上の考察を通じ、いかなる意味で『方法序説』の主目的が我々の本性を高めることにあったと言えるか、複合的な視点から明らかにする。

二つの「自己原因」— J.-P.サルトルにおける神の問題

根木 昭英

（日本学術振興会特別研究員（PD））

サルトルの知的営為が、神との徹底的な対峙によって貫かれていることはよく知られている。しかし、いかなる曖昧さも容れないように見える彼の態度をひとまず措いてみるならば、理論面におけるサルトルの神批判は、その見かけほど単純なものではないように思われる。伝統的な神学の議論において、神の存在証明が複数の「神の名」から出発して複数の仕方で行われたように、サルトルによる神の反駁もまた、「即かつ対自」および「自己原因」という二つの異なった定義から導かれている。こうした二重性が、神をめぐるサルトルの思索に、一筋縄ではゆかない難しさをもたらしているのである。

このような視点から出発して、本発表は、サルトルによる神の定義とその反駁を検証し、そこに見られる諸概念の分節様態を探る。発表においては、最初に『存在と無』（1943）や『モラルのためのノート』（1947-48執筆）などにおける神の定義を整理し、サルトルにおいて、「即かつ対自」と「自己原因」という二つの概念が、ひとまずはどのような形で神の観念へと統一化されているかを確認する。つぎに、それを踏まえてサルトルによる神の批判を分析し、さまざまな角度から繰り返されている神の存在の不可能性の証明が、最終的にはひとつの根本的なテーゼへと収斂していくことを確認する。そのうえで、サルトルによる神の二定義のうち、とりわけ「自己原因」の側面に着目して、これを一方では「神／自己原因」をめぐる神学的議論——聖トマスからデカルト、スピノザを経てライブニッツにいたる——の流れに置くとともに、他方で「自我の超越」（1936）、『想像力』（1936）といったサルトルの初期論考とも接続することで、彼の考える「神＝自己原因」の内実を明らかにするべく試みたい。これらの分析を通じ、神をめぐるサルトルの思索の特質として、次の四点が提示される予定である。すなわち、[1] 表層的な水準においては、サルトルは「自己原因」に関する神学の伝統的な議論を忠実に継承しているように見えること、[2] しかしより仔細に見れば、サルトルがこの概念を、「即自」と「対自」をめぐる独自の存在論の枠組みに合わせて換骨奪胎し、事実上これを我有化していること、[3] サルトルにおける「自己原因」の概念が、「神の創造性」という意味のみならず、初期論考で強調された「（人間的）意識の自発性・自由」という意味も帯びていること、[4] サルトルにおける神の観念が、構造的にも発生論的にも、「人間のイマージ」としての性格を強く有していること、以上の四点である。そして最後に、全体の考察を踏まえて、サルトルにおける神の二定義のうち、じっさいには一方が優越的な地位を占めていることをも示すこととしたい。